⑦「恐怖」について［これは恐怖について考えるための参考資料である――編集者］

村瀬氏は恐怖という現象の原理的考察を試みた本である『恐怖とは何か』の「はじめに」の冒頭で次のように述べています。

恐怖とは何か。それは安全からのはずれ、あるいは安全でなくなることへの反応である。だから恐怖について何かを問おうとするなら、私たちは同時に〈安全〉とは何かについて問わなくてはならなくなる。そして実はこの安全を問うことがたいへんむずかしい問いになっていたのである。

Q　これは具体的にはどのような事態を言っているのでしょうか？

I　村瀬氏は「恐怖を問うことは安全を問うことでもあるとの認識に立って、安全性というものが、確実なもの、確固としたもの、というイメージのもとに見られるものであり、それがわれわれの安全を保障する〈土台〉のイメージとしてあったものである。その〈土台〉の上に立っていることが、安全という状態だったのである」旨述べています。

Q　そうなりますと、「土台」のイメージが重要になってくると思われますが。

I　村瀬氏は「土台」の理念型を三つ取り出しています。

「身体」の土台、「倫理」の土台、「論理」の土台の三つです。「身体」の土台は、高い所から落ちそうになれば、恐怖にかられる。これは身体の安全性がおびやかされるからであり、身体は先天的に安全性を守る土台を有しており、そこからはずれると、センサーが働き、恐怖という警告を発するようにできている。続いて共同の土台の上で、人々はそれぞれの暮らしを侵害せず、守り合い、安全を保障し合っている。この共同の土台、倫理の土台が失われると、われわれは日々強奪や殺害の憂き目にさらされることになるだろう。それは恐怖の世界で

ある。このように共同性の世界が「倫理」の土台である。最後に「論理」の土台。これは観念をもってしまった人間が、観念の中で完璧さを求め出したところにはじまるものであり、強いて言えば「1＋1＝2」の世界と言うべきものであり、広い意味で言うところの「論理」の世界である。幾何学の世界、機械の世界、コンピュータの世界などがこれにあたるもので、ここに求められるのは「完全」とか「完璧」とかいった土台であり、歯車ひとつでも「完全」にかみ合わなければその機械は動かないなど、それは完全や完璧をおびやかされることへの恐怖である。

このように、村瀬氏は鮮やかに三つの土台の意味を説き明かしていきますが、この場面は村瀬氏の周到さ、一つの事象をトータルに捉えていこうとする姿勢がよく出ていると思います。更に村瀬氏は、この三つの領域で起こる恐怖は、そのそれぞれの領域のもつ固有の安全基準によって、すべて違った形で感じ取られるという事態が起こっている、と述べています。

Q　この三つの領域はそれぞれ重なる部分はないのでしょうか？

I　それについては、村瀬氏は先の本の中で三つの土台の関係を図示している（ここでは省略しますが）ところから分かるのですが、それぞれが円で描かれた三つの土台は、三つすべてが重なる部分があるような結びつきをもったものとして描き出されています。したがって、恐怖が起こる領域としては、「論理」と「身体」、「論理」と「倫理」、「身体」と「倫理」、「論理」と「倫理」と「身体」、「論理」のみ、「倫理」のみ、「身体」のみの場合が想定されることになると言えるわけですね。

Q　総じて恐怖現象を把握していくための基軸となるものを村瀬氏の理念型は見事に簡潔な形で提供してくれているわけですね。